

持続可能な発展〈Sustainable Development〉をめざして

「タイ発！地域医療再生の処方箋」

～地域づくりから始めた医師夫妻24年の歩み～

琉球大学医学部附属病院 地域医療部 武村 克哉*、村山 貞之
 今帰仁診療所 石川 清和
 三重大学地域医療学講座 武田 裕子



去る3月2日（火）および3日（水）に、それぞれ今帰仁村コミュニティーセンター、沖縄県医師会館において、タイで24年間地域医療に従事されているタンロンワランゲン医師夫妻による講演会が開催された。講演会は平日に行われたにも関わらず、今帰仁では60名余り、沖縄県医師会館では40名余りの方が参加され、盛況であった。医療関係者のみならず、一般の方や学生も参加し、地域医療への関心の高さが窺えた。この誌面を借りて、本講演会の内容を報告する。

1. 「地域医療とESD（持続発展教育：Education for Sustainable Development）」 三重大学地域医療学講座 教授 武田裕子

従来の医学教育では、教育の場は大学の教室、あるいは教育病院である大病院の病棟であったが、近年日本および世界各国では、健康問題の予防・治療の場である「地域」を学習の場とする地域基盤型医学教育が行われるようになってきている。ESDという概念に出会い、地域医療教育の中に活かせるのではないかと感じた。WHOの定義によると、健康とは単に疾病がないことではなく、身体的・精神的・社会的に良好な状態のことであり、オタワ憲章に謳われている健康の前提条件が満たされる必要がある。持続可能な社会をつくるための教育であるESDの視点は、地域に関わるあらゆる人々にとって必要なものである。三重大学では、文部科学省国際協カイニシアティブ事業として、ESDの理念に基づいた地域医療教育モデルを開発している。タイのウボンラット病院を訪れ

たときに、医師による地域におけるESDの実践活動に感銘を受けた。日本では地域医療崩壊といわれているが、ここに解決のヒントがあると感じ、今回の講演会を企画した。

2. タイのへき地病院に勤務する医師夫妻の 実践報告

NPO 法人持続可能な地域づくり事業団代表・
 医師 タンティップ・タンロンワランゲン先生

ウボンラット病院は、タイの東北部のへき地にあり、約46,000人の住民に医療を提供している。私は子供の頃、病気で苦勞をした体験からへき地の医者になろうと決め、24年間ここで働いている。病院にはボランティアの方が4名働いている。

ウボンラット病院では、増加する糖尿病患者のケアをより良くするため、地域ごとに糖尿病外来の日を決め、その地域の患者約30～35人が同じバスに乗り合わせて病院に来院できるようにし、エクササイズ、健康教室、歯科衛生



病院内の有機野菜売り場：病院の畑では有機栽培を行い、意義を理解した村民の間にも有機農業が広がっている。

士・理学療法士・医師による診察、薬の説明、フットケア、糖尿病コントロールに成功した患者宅訪問を1日で行っている。これらの活動を通して、医療者側と患者との間に信頼関係が生まれ、当初患者に指導するという立場で接していた医療者側が、仲間として接するようになっている。

**コンケン・ウボンラット病院 院長
アピシット・タンロンワランゲン先生**

ウボンラット病院に赴任した当初は、質の高い医療を提供することが、地域の健康レベルを上げることだと信じ、「具合が悪かったらすぐ病院に来るように」と話していた。しかしその考えは間違っていた。患者が増え、一人ひとりに十分な時間をかけられず、医師も看護師も皆疲弊してしまった。患者調査をしたところ、治療しなければ亡くなっていたと考えられる人が約1/4の割合を占めていた一方、治療してもしなくてもよくなっていた人が約3/4の割合を占めていた。地域のヘルス・センター、薬売店、伝統療法士と協力し合うことで、病院を受診する患者数を減少させることができ、診療の質の確保、健康増進や予防活動などに力を注ぐことができた。地域を健康にするために、地域に伝わる知恵も活用している。デング熱の流行を抑えるため、ボウフラを食べる魚を教えもらい、村民に配り、住居近くの池で飼うようにしてもらったところ、デング熱の患者数を激減させることができた。

昔は、お金が手段ではなく、目的になっていた時代があった。若者は都会に出稼ぎに行き、家族が離れ離れとなった。中には薬物中毒になり、HIVに感染して帰村する例もあった。そのような中、持続可能な発展、つまりずっと地域が栄えていくような暮らし方をする人たちが出てきた。成功した村民は役に立つ知識を皆で分かち合い、村が豊かになった。若者が村に戻るようになり、家族皆が一緒に幸せに暮らせるようになっている。障害があっても働く場があり、自然と共に暮らし、地域の中で助け合うコミュニティが生まれた。地域の住民が力を合わせることで、健康で、幸せに暮らすことができる。



タイでは、国王により自助自立を促す「足るを知る経済 Self sufficiency economy」が進められ、自分が持っている資源を有効に活用し、庭で野菜、きのこ、家畜、木などを大切に育てている。

以上が、講演会の内容である。講演の後、両会場とも活発な質疑応答が交わされた。タイと日本の背景は異なるため、日本で同様の活動を広めるのは困難なのでは、という質問も出たが、タンロンワランゲン医師夫妻は具体的な例を挙げ、「日本や世界の他の国にも、私たちが大切に思っていることを同じように大切に思っている人がたくさんいる。皆が手を取り合い、活動を広げていくことで地域を良い方向に変えていくことができる」と述べられた。

今帰仁の講演会では閉会の辞のなかで、北部地区医師会上地博之副会長が、「タイでの取り組みは、まさに沖縄の“ゆいまー”の心に通じる」と述べられた。県医師会館での講演の最後に、この講演から考える地域医療再生のポイントを、企画者（武田）は以下のようにまとめた。

- ①健康であり続けるために地域で取り組めることは何か、共に考え、地域の中で活動する。
- ②住民は、地域の医療機関が機能し続けるために自分たちがなすべきこと、できることを考え、行動に移す。
- ③医療者は、地域の健康課題とニーズに沿った働きかけを行うことで、地域の力を引き出す。

参加者からは、「豊かさ」「健康」「幸せ」とは何かを考える良い機会になった、心を揺さぶられた、今までに聞いたことのない感動的な講演だった、などの感想を頂いた。最後に、この講演会開催にあたり、多くの方に大変お世話になった。この場を借りて厚く御礼申し上げる。